

最期まで愛するために

三年 亀田ゆい

汚れた目元、痩せ細った体、そしてかつては艶を持ち、情熱的な赤だったのであろう首輪。そう、愛情の赤。愛は存在していたように感じられた。

それは、高齢の飼い主とくらしていたが、飼い主は亡くなり発見まで長い期間のこされた犬の姿だった。当時それをテレビで視聴した私は現実を目の当たりにし、新しい考えを持ちはじめた。「持つべきは愛情だけなんて大嘘だ。」と。

分かっている。この意見は生き物に限らず何かを愛する人の心を傷つけてしまうことを。しかし、車が好きだからといって何台も何台も車を買えば、やがて困窮してしまうだろうし、動物を寂しいから、愛しているからといい増やしすぎると家庭は崩壊し本人も動物も苦しくなっていくのではないか。冒頭の話に関してもそうだ。飼い主は八十七歳で長い間を共にした家族や友達も亡くなり寂しさをうめるために大好きな犬を迎えた。しかし、年老いた体はもう長くはなく、その犬をのこして亡くなってしまったのだった。飼い主の発見はおくれ、同時にその犬も見つかった。その犬は飼い主のそばにいた。二人は強い愛情で結ばれていたのだろう。しかし、その愛は私には辛いものに感じられた。そうだ、愛

情はもちろん、他にも考えるべきものがあるのではないか。

冒頭の話を初めに思い出したのは二年前。私たち家族が、ある動物をお迎えした時だ。お迎えまでの勉強に使った本にあった

『最期まで責任を持つて愛すること。』

この言葉を読み返して私は思い出した。私はやもやとした気持ちになった。そして、自問自答。

本当にその子が好きか。

当然だ。大好きだ。

その子が病気になるたらどうする。

病院は調べた。応急処置も。

お金についてはどうだ。

電気代、餌代、いろいろ話し合った。

では、誰かがいなくなったら――。

自分が死ぬこと、大好きな誰かが亡くなるのを考えるのは正直怖かった。けれど、自分より弱い命を迎える人として向き合わなくてはいけない問題だ。お金について、自身の体について、命について、全部。

そして、私は六人家族であるため、もしも誰かがいなくなっても最期までこの子を愛せるために、自分の体調を管理し家族みんなが世話に慣れるようにした。

持つべきは愛情だけではないということのは、お金や自分の体、もしものときにその子を引き取る人について考えてほしいということだ。愛は素晴らしいもので否定しているわけではなく。お互いが幸せであるために考えてみてほしい。